

主 論 文 要 旨

報告番号	① 乙 第	号	氏 名	谷 英 明
主 論 文 題 名 Comparison of emotional processing assessed with fear conditioning by interpersonal conflicts in patients with depression and schizophrenia (うつ病および統合失調症患者における対人葛藤刺激を用いた恐怖条件付けに対する情動処理の比較)				
(内容の要旨) 精神疾患患者の不安や恐怖に、情動処理過程が重要な役割を果たしていると考えられているが、疾患群間の違いは十分に明らかにされていない。また、情動学習に関する先行研究では音や電気刺激などの単純刺激を用いたものが多いが、精神疾患患者では、対人関係などのより現実的で高次の精神活動に対する不安感や緊張感の評価が重要である。そこで、対人葛藤刺激の条件付けモデルを作成し、健常者で条件付けが成立することを確認した (Tada et al. 2015)。本研究では、この条件付けモデルを用いて、うつ病と統合失調症患者における対人葛藤刺激に対する反応を皮膚コンダクタンス反応 (skin conductance response : SCR) により比較した。 女性の統合失調症患者20名とうつ病患者20名を対象に、対人葛藤刺激による条件付け試験を行った。この系は陰性刺激として不快感を喚起するような台詞を無条件刺激として用い、俳優の写真を条件刺激 (conditioned stimulus : CS) とした。そして、馴化、条件付け、消去の相からなる実験パラダイムを施行し、条件付け及び消去の程度をSCRで測定し、同一の手法で実施した先行研究の健常者20名の結果と比較した。条件反応は、無条件刺激と組み合わせられた条件刺激 (CS+) と、無条件刺激と組み合わせられなかった条件刺激 (CS-) のSCRの振幅差 (differential SCR) で定量化して条件付けの有無を判定し、臨床的な特徴との関連は重回帰分析で評価した。 うつ病群では条件付けは成立したが、健常者に比べて消去が遅かった。そして消去相早期のdifferential SCRは感情調節尺度の表出抑圧スコアと正の相関が ($\beta=0.94, p=0.01$)、認知再構成スコアと負の相関があった ($\beta=-0.88, p=0.04$)。また、抗うつ薬使用は消去相後期のdifferential SCRと負の相関があった ($\beta=-0.71, p=0.02$)。一方で、統合失調症群では条件付け相のCS+とCS-のSCRに有意な差を認めなかった。また、条件づけ相のdifferential SCRは陽性症状陰性症状評価尺度の陰性症状スコアと負の相関があった ($\beta=-0.92, p=0.03$)。 本研究より、統合失調症の女性患者、特に陰性症状が強い症例では情動認知が障害されていることが示唆された。また、うつ病患者の否定的な対人葛藤は抗うつ薬の使用や認知行動療法による情動の自己制御によって緩和する可能性が示された。但し、女性のみを対象としていること、横断研究のため、臨床的特徴と連合学習のパターンの因果関係については言及できないこと、脳機能検査を行っておらず連合学習の局在が検討できないことが限界点としてあげられる。今後、情動学習プロセスの神経基盤解明のため、脳機能画像や情動に関連する分子の探索を含むさらなる研究が望まれる。				